

[掲載紙] 上毛新聞「点描ぐんま経済 日銀支店長 見聞録」

[掲載日] 2017年8月25日

[テーマ] 水資源の高度インフラ—金融が見習うべき点—

夏休みを利用して群馬県内各地を訪れた。みなかみ町では、利根川を下るラフティングに挑戦した。また、美しい溪流を眼下に望みながら源泉100%かけ流しの露天風呂を堪能した。共通しているのは、水資源が生み出す豊かさだ。

群馬県は首都圏の水がめとして、貴重な水資源を有している。筆者は長らく東京在住だったが、過去に、利根川水系で水不足の懸念があり取水制限がかかるかもしれない、といったニュースを見たときには、強い不安感を覚えたものである。

水道水から作った氷が入ったジュースを飲んだだけで、腹痛を起こしてしまうような外国を、以前、訪れたことがある。そうした所にいると、日本の水事情がいかに恵まれているかを痛感することになる。日本の中でも群馬県の水はおいしい方に属するに違いない。おいしい飲料水が蛇口や井戸から出てくるのは、ここでは当然のことに思えるが、それをいつも可能にしているのは、水源から消費者をつなぐ非常に高度なインフラが整っているからである。

台風一過後に訪れた吹割溪谷は、目前に迫る水量が多く迫力があつた。水資源の管理という意味では、台風や集中豪雨による水害を防ぐための治水も重要だ。ダムや堤防などの治水のためのインフラが、通常の想定を超える災害時にも、人命や財産を守るためにその機能を発揮するように設計されているからこそ、群馬県は災害による被害が少ない、との安心感が醸成されているのだろう。

ところで、日本銀行は、お金のやりとりを行う「決済システム」というインフラを、社会に提供する役割を担っている。大きなショック（例えば2008年のリーマン・ショック）に見舞われても、安心して利用できる決済インフラを提供するためには、危機的な状況にも耐えられるような備えが必要だ。水資源の分野での信頼度の高いインフラのありようから、決済インフラが学ぶべきことは多い。

日本銀行前橋支店長
岸 道信